第６分科会

「子どもの発達を踏まえた指導法の工夫」
～小学校教育への円滑な接続に向けた保育の充実～

助　言　者　味園　佳奈（鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻 主任教授）
司　会　者　内木場美紀（めぐみ幼稚園）
問題提起者　山田　一華（鴨池しらうめ幼稚園）
記　録　者　前之原　舞（鴨池しらうめ幼稚園）
運営委員　牛堀　隆弘（鴨池しらうめ幼稚園）

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

発達とは，心身の成長に伴って，子どもが周りの人的・物的な環境と相互に関わり合う中で，生活に必要な能力や態度が育まれていく過程であり，幼児期の子どもには，自ら成長していこうとする力と周りの環境に対して自分から進んで働きかける力が備わっている。このことから，子どもの姿をある時点で何かが「できる，できない」といった一つの枠にはまった捉え方で見ようとするのではなく，それぞれの子どもがよりよく変化しようとする過程のすべてに寄り添い，援助しようとする考え方で保育を行うことが大切である。

また，子ども一人一人の周りの環境の受け止め方，環境への関わり方は様々であり，その子なりに興味や関心をもって環境に関わり，その子なりの思いを実現するための様々な体験をしている。このことから，子どもの一人一人の発達の特性を理解し，その特性やその子どもの発達の課題に応じた環境設定や支援を工夫することが重要になる。

そこで,「子ども一人一人のことをもっと深く理解し，寄り添ってあげたい」という思いを保育者が共有し，幼児期の発達の特性や成長していく過程の理解を踏まえた環境や援助の在り方を改善するために,「子どもの発達を踏まえた指導法の工夫」をテーマに掲げ研究を進めることにした。そして，実践で明らかになった子どもの姿を学童期へつながるように保育を充実させたいと考えた。

【研究・研修の手がかり】

⑴　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりにして，期待する子どもの姿についての共通理解を深め, 学年ごとに研究保育等を累積し, 子どもの発達や実態に応じた適切な指導法（環境構成，保育者の援助等）についての検証を図る。

⑵　発達の連続性と「小学校教育への円滑な接続」を意識したカリキュラムの見直しができるように，５歳児後半の保育を共通実践し，子どもの姿を見取り共有する。

【研究計画】

（令和６年度）

子どもの発達段階や実態の把握を踏まえ，指導法（環境構成・保育者の援助）を工夫した取組をすることにより，一人一人の子どもに寄り添う教育・保育の充実を図る。

（令和７年度）

子どもの発達の連続性を踏まえ,「小学校教育への円滑な接続」に向けた保育の充実を図る。

【発表の概要】

⑴　研究・研修テーマの捉え方

子どもは自ら環境に働きかけて成長する存在であるという「子ども観」のもとに,「のびのび保育」を実践する中で，成長していく過程や変化の姿の理解に努め，一人一人の実態の把握を大切にした「子ども理解」に基づく研修を進めてきた。特に, 重視したポイントとして,「できていない」

姿を観察するのではなく,「○○ができるようになっていく」成長や変化の姿を捉えることを大切にし，その姿を生み出したきっかけや要因は何（環境構成，保育者の援助等）だったのかを意見交換し，成果を記録に累積してカリキュラム改善に活かしていくこととした。

また，保育者が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通して見取ることで,「小学校教育への円滑な接続」を意識した保育の実践につなげ，そのことが「年少少・年少から年中へ，年中から年長へ」という園内での「つながり」を意識したカリキュラムづくりにも発展できるように実践を進めることとした。

⑵　研究の内容

ア　子どもの発達の連続性と子どもの育ちの見取り

・　全クラスで研究保育を実施し，子どもの発達や実態を見取り，効果的な指導法を共有する。

イ　「小学校教育への円滑な接続」に向けた保育の充実

・　５歳児後半のカリキュラム（10月～３月）の子どもの姿を明らかにし，共有する。

⑶　研究の方法

ア　抽出児に関する事前の情報交換を基に，学年ごとに研究保育を行い，共通実践化を図る。

イ　３学期に園全体で行われる行事「お店屋さんごっこ」において，子どもの姿を見取り，小学校教育への円滑な接続についての共通理解を図る。

⑷　実践例

ア　実践１「おにあそび」（年長「バナナおに」，年中「けいどろ」，年少「しっぽとりおに」）

・　ルールや約束事に目を向けながら，友達と過ごす楽しさや面白さを味わう。

イ　実践２「お店屋さんごっこ」

・　品物作りやお店屋さんごっこを楽しむ中で，品物を作り上げた満足感や協力し合う大切さを味わう（品物作り，お店の屋台作り，お金作り，財布作り）。

・　売り手や買い手になって,“ごっこ遊び”を広げ，表現することやたくさんの友達とかかわって遊ぶことを楽しむ（ミニお店屋さんごっこ→異学年交流→お店屋さんごっこ）。

⑸　まとめ

ア　研究保育において参観者が観察する子どもを事前に抽出･分担し,見取った個の姿（よさ,成長）の相互交流により，これまで見逃しがちだった姿を見取ることができた。また，抽出児の姿を交流することで，保育者同士で「子どもの見方（子ども観)」を高め合うことができた。

イ　「おにごっこ遊び」の活動は，遊び方や遊ぶ場所等の「環境設定」を工夫したり，イラストや模範の提示等の「援助」を工夫したりすることで，やや複雑なごっこ遊びについても学年段階や個の実態に応じて楽しむことが可能であると確認できた。

ウ　「お店屋さんごっこ」は，制作を工夫する場面，異学年での交流場面をより多く設定でき,「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」等の多くの姿を見取ることができることから，小学校への架け橋期のカリキュラムとして３学期に位置付けることが有効であると再認識できた。

⑹　今後の課題

ア　日々の実践の中で見取った子どもの姿，週案や連絡帳等に記録している子どもの姿を累積し，カリキュラムの改善に活かし，次年度以降の担任に引き継げるようにする。

イ　「おにごっこ遊び」以外の活動においても，発達段階や実態を踏まえた実践を保育者同士で相互交流する機会を増やすことで，子ども理解をより深め，指導法（環境構成，保育者の援助）の工夫に活かしていく。

ウ　「お店屋さんごっこ」の活動を中心に，異年齢での交流の機会を増やすことで「幼少期の終わりまでに育ってほしい姿」をより多く引き出すことができ，工夫した活動内容や環境構成，保育者の援助を５歳児後半のカリキュラムに具体化し，小学校との情報共有を図る。

【討議の柱】

・　子どもの発達や実態を踏まえた保育を進めるために，どんな手立てを工夫しているか。

・　「小学校教育への円滑な接続」に向けて，５歳児後半のカリキュラムをどんな保育内容で，どんな環境構成や援助の工夫を行っているか。

【討議内容】

1　問題提起に関する質疑応答・感想

⑴　質問：鬼遊びをする際に，各クラスにおいて環境作りの工夫の仕方で重点としたことは何か。

回答：全学年，朝の自由遊びの中で，子どもたち同士で遊んでいたことを導入で話し「やりたい」の声を引き出す工夫をした。年長・年中ではイラストを使っての遊び方や，話に集中できるように部屋と戸外での約束事について話した。年少では追いかけっこをみんなで楽しむ中で，ルールについて紹介し，しっぽ取りのように視覚的に分かる物を取り入れて，楽しさに気付くことができるようにした。裸足保育であるため，遊ぶ際の安全面への配慮にも注意しながら環境作りにも努めている。

⑵　質問：裸足保育，異年齢の関わりについてどのような取り組みをしているのか。

回答：裸足保育は，５月～11月の期間に行っている。異年齢の関わりは，行事に向けた活動の際に年少・年少少児が年長・年中児の活動の様子を見に行き，例えば，今回の事例のお店屋さんごっこでは，お金作りや品物作りを見学し，楽しく活動する姿を見て自分たちも「やってみたい」の意識化を図っている。

⑶　感想：お店屋さんごっこを当日のみ行うのではなく，ミニお店屋さんごっことして一度経験できる場があることで子どもたちが自分で多くのことに気付き改善に繋がり，参考となった。

2　グループ討議

⑴　子どもの発達や実態を踏まえた保育を進めるために，どんな手立てを工夫しているか。

・　支援が必要な子どもが多いため，写真や動画などで視覚的な訴えを行っている。
・　月に一回,NHKが作った動画であいさつや友達との関わりについて視聴している。動画で見たことを振り返りながら子どもたちと関わるようにしている。
・　職員間だけでなく，保護者や療育先との連携を図ったり面談をしたりして情報を共有する。
・　年間カリキュラムを見直し，子どもたちに応じた活動や流れができるようにしている。
・　色々な活動を試していく中で，得意なことや不得意なことに気付き理解を深め，それに応じて保育内容を考えたり工夫したりしている。
・　学年が上がった際に,前担任に保育内容や実態を聞いて連続的に保育できるようにしている。

⑵「小学校教育への円滑な接続」に向けて，５歳児後半のカリキュラムをどんな保育内容で，どんな環境構成や援助の工夫を行っているか。

・　トイレのスリッパや絵本を並べる係などの当番や日直活動を行っている。
・　文字遊びの中で鉛筆を使い，集中力をつける。線や平仮名の練習をしている。
・　小学校の先生に来ていただき，子どもたちの実態を共有し，就学までにしてほしいことなどを聞く。
・　０歳から漢字教育をしており，45分間の授業で座り続けることができるよう，学年が上がるにつれて座る活動を長くしている。
・　保育室の整頓や掃除を子どもたちと一緒に行う。
・　こぼした時や忘れ物をした時，困ったときに一人で対処できるように声掛けや援助を行う。
・　保護者との会話の時間を大切にしている。年長になっていきなり就学の話をすると保護者は驚いてしまうため，年少から少しずつ伝えているようにしている。

【助言者のまとめ】

◯助言者：味園 佳奈先生（鹿児島純心女子短期大学 生活学科 こども学専攻 主任教授）

◎　子ども理解

- 子どもは,「ひと・もの・こと」に出会いながらそれらに関わりながら学んでいく。「ひと・もの・こと」とは主体的な学びを促すものであり，子どもにとって魅力的なものである必要がある。
- 環境を整えるのは保育者である。子どもたち一人一人にふさわしい環境を整えることが大切である。

◎　架け橋プログラム

- 授業中，教室を勝手に歩き回ったり，先生の話を聞くことができなかったりする小1プロブレムが課題の一つにある。小1プロブレムが起きる理由は,「段差」を感じる子どもたちの姿があるからである。幼児教育と小学校教育において施設・設備や通学・通園方法，教育・保育方法等の違いはあるが，子どもたちにとって乗り越えられない大きな「段差」ではなく，乗り越えられそうな「段差」にして，新しい小学校生活に円滑に移行していくための手立てが必要になる。
- 架け橋期とは，義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間は，生涯にわたる学びや生活の基盤を作るために重要な時期である。
- ５歳児は，それまでの経験を生かしながら新たな課題を発見し，新しい方法を考えたり試したりして実現しようとしていく時期で，小学校１年生は，自分の好きなことや得意なことが分かってくる中で，それ以降の学びや生活へと発展していく力を身に付ける時期である。
- 小学校との連携に課題があると捉えている園は，７～９割ほどあるというデータがある。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の正しい理解を促し，教育方法の改善に生かしていくことができるようにしたり，接続期に保育者が行っている環境構成や子どもへの関わり方に関する工夫を見える化したりするなどして，小学校との連携の一層の充実を図りたい。そうした取り組みは家庭や地域との連携にも繋がり，幼児期の教育・保育への理解の促進にも繋がる。

◎　スタートカリキュラム

- 今日，小学校では「スタートカリキュラム」の実践がなされている。「スタートカリキュラム」とは，遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と，各教科等の学習内容を系統的に学ぶ児童期の教育課程間の接続の課題に応える具体的な手立てのことである。入学して間もない頃に，活動ごとの時間を区切る柔軟な時間割や体験的な活動の重視などを取り入れ，幼稚園や保育所等の生活に近付けることで，子どもたちにとって分かりやすい環境を作り，興味や関心に沿った学びから興味や関心を生かした学びの展開を工夫することが可能となり，主体的な学びを確立していこうとするものである。

◎　幼児期の教育に求められること

- 幼児期の学びは,「学びの芽生え」を培う時期であり，環境を通して学ぶものである。
- 子どもたちが経験することは何か，目に見える姿から何が育っているのか，何が育ちつつあるのかを捉えることが重要である。
- 子どもにとっては遊ぶこと自体が目的であり，遊びを通してそのプロセスの中に様々な学びがある。
- そのためにも日頃から保育を振り返り，子どもの行動を意味づけるために保育記録を書くことを意識したい。外側に表れた姿から子どもの内面を見て，継続的な記録をしたり，場面記録をしたりすることで，保育の見える化を図り，幼保小の接続や家庭・地域との連携にも活用してほしい。保育の見える化は保育の質改善にも繋がる。保育者にとって保育を振り返るツールになるし，子どもたちにとって学びの自覚化を促すツールにもなる。子どもたちの育ちをしっかりと支えていくためにも日頃の記録をいかにとり，どのように活用していくかが鍵となってくる。